

カラフトマス 日本系

Pink salmon *Oncorhynchus gorbuscha*



管理・関係機関

北太平洋溯河性魚類委員会 (NPAFC)
 日口漁業合同委員会

生物学的特性

- 最大体長・体重：尾叉長 70cm・5 kg
- 寿命・性成熟年齢：ほぼ全てが2歳（成熟すると繁殖して死亡）
- 産卵期・産卵場：8～10月、北海道北東部に流入する河川
- 索餌期・索餌場：夏期・北西太平洋
- 食性：水生昆虫（河川）、動物プランクトン・マイクロネクトン（海洋）
- 捕食者：鳥類・オシロココマ等魚類（幼魚）、ネズミザメ等大型魚類・オットセイ類等海産哺乳類（未成魚・成魚）

利用・用途

用途は広く、塩蔵品、生鮮、缶詰等がある。魚卵製品として、筋子（ます子）がある。

漁業の特徴

主に北海道北東部沿岸の産卵河川周辺で夏～秋季に定置網で漁獲される。広く北太平洋を回遊するが、北太平洋公海のさけ・ます漁業は禁止されている。他国 200 海里水域内での漁獲量は不明である。

漁獲の動向

1970年代から沖合域での漁獲量は減少し、沿岸域の漁獲量が増加した。沿岸漁獲数は、1990年代に急増し偶数年と奇数年の差も広がった。しかし近年、奇数年と偶数年で一定の豊凶が見られるものの、そのパターンの持続性は不明瞭になり、日本系カラフトマスは不安定な資源動向にある。2021年漁期（7月以降）の沿岸漁獲量は55万尾と著しい不漁となるとともに、2022年漁期の沿岸漁獲量（速報値）も21万尾と著しい不漁となった。最近5年間（2017～2021年）の沖合を含む漁獲量は約1.4千～10.1千トンであった。

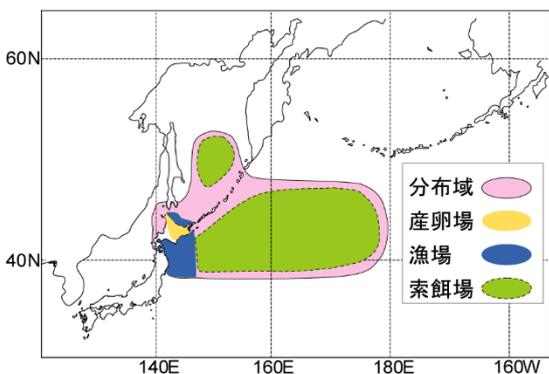
資源状態

稚魚放流数は1980年代から1.4億尾前後で安定しているが、来遊数（沿岸漁獲+河川捕獲）は、1970年代後半～1980年代前半の約100万尾から、1990年代には500万尾以上となった。しかし、2009年以降は、来遊数（沿岸漁獲数と河川捕獲数の合計。但しここには自然産卵群の数が含まれていないので、正確には来遊「漁獲」数の意）は大きな変動を繰り返しながらも全体的には年々減少する傾向にある。2022年に過去54年間で7月以降の沿岸漁獲数が最も少ない21万尾に陥ったこと、前年の2021年は同一系統である前奇数年比で63%であったことから、資源水準は低位であり、減少傾向にあると判断された。

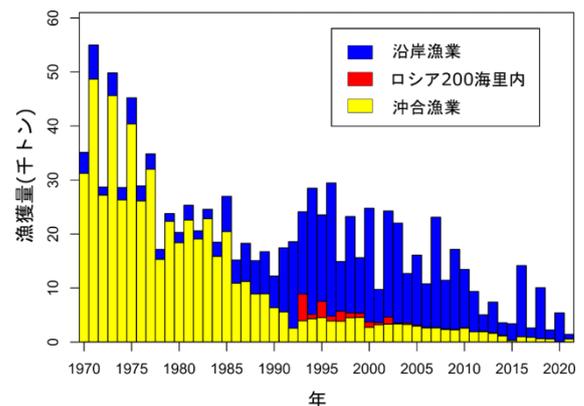
管理方策

繁殖期の降水量と冬期・春期の平均気温を説明変数として作成した再生産曲線を元に来遊漁獲数を予測し、以前の資源水準に回復できる河川遡上数を残り残すという、産卵親魚量一定方策による管理を提案した。持続的沿岸漁獲数は0尾と推定されたことから、沿岸域における禁漁措置も含めた漁獲圧の大幅な削減を検討する必要がある。また、自然産卵由来のカラフトマスが沿岸漁業に大きく貢献していると考えられることから、ふ化放流に使用しない親魚の再放流を義務付けるなど、自然産卵を行う親魚を保全する管理措置の早期導入が資源回復のために必要不可欠である。

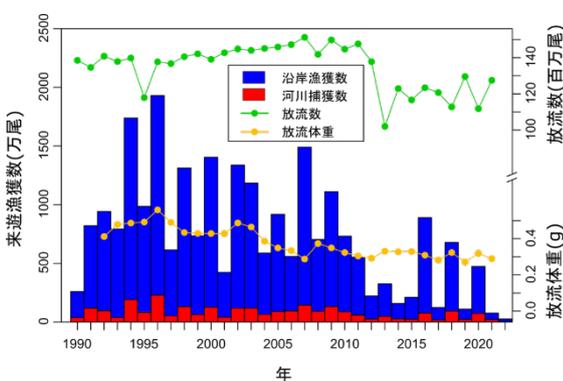
カラフトマス（日本系）の資源の現況（要約表）	
資源水準	低位
資源動向	減少
世界の漁獲量 (最近5年間)	27.9万~64.9万トン 最近(2021)年:64.9万トン 平均:49.8万トン(2017~2021年)
我が国の漁獲量 (最近5年間)	約1.4千~10.1千トン 最近(2021)年:1,433トン 平均:4.4千トン(2017~2021年)
日本系カラフトマスの 我が国の沿岸漁獲量 (最近5年間)	約0.3千~8.0千トン 最近(2022)年:289トン 平均:3.2千トン(2018~2022年)
管理目標	産卵親魚量一定方策 目標値:河川捕獲数約142万尾
資源評価の方法	沿岸漁獲数及び河川捕獲数により水準と動向を評価 再生産モデルによる解析
資源の状態	2022年の河川捕獲数/目標値=0.05
管理措置	・稚魚放流1.3億尾 ・幼魚・未成魚期・成魚期 EEZ 外ならびに成魚期河川内での禁漁
最新の資源評価年	2022年
次回の資源評価年	2023年



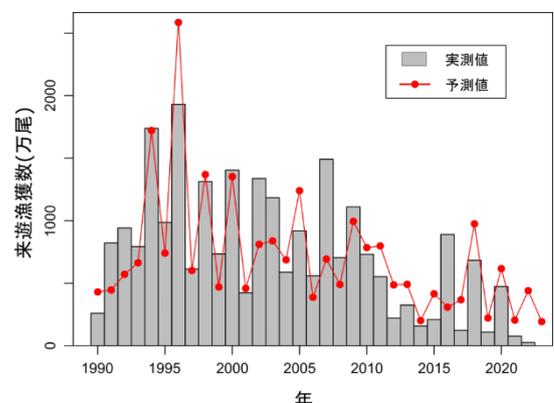
日本系カラフトマスの主たる分布域



日本の漁業におけるカラフトマスの漁獲量の推移 (1970~2021年)



日本系カラフトマスの来遊漁獲数、放流数及び放流体重の推移 (1990~2022年)



日本系カラフトマスの来遊漁獲数の予測値と実測値の関係 (1990~2022年)